

令和2年度
宮崎県教育研究連合会宮崎支会
研究員研究論文

伝え合う力を高める指導の工夫
～人との関わりを大切にした「話すこと・聞くこと」の指導を通して～

宮崎市立 檉小学校
教諭 吉井 湧人

I 研究主題

伝え合う力を高める指導の工夫
～人との関わりを大切にした「話すこと・聞くこと」の指導を通して～

II 主題設定の理由

自分の思いや考えを音声言語で相手に伝えることは我々の生活において、主要な部分を占めるものである。朝の挨拶から始まり、たわいもないカジュアルな会話、仕事でのフォーマルな会話など、日常生活においてコミュニケーションは必須の存在である。しかし、スマートフォンや一人で遊べるゲームなどが普及した現代では、子どもたちが日常生活の中で人と直に話をしたり、意見を交わしたりする場が今まで以上に減少している。そこで、学校生活や授業の中で子どもたちの「伝え合う力」を育むことは、これからますます重要になると考える。

「小学校学習指導要領解説国語編」(2017)では、「(2)日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」とあり、「伝え合う力」を高めることが求められている。言語を用いる人との関わりを通して、論理的に思考する力や豊かに想像する力は、未知の状況においても対応できる力であり、これからの変化が激しい社会を生き抜くための重要な力となる。さらに、日本学術会議「日本語の将来に向けて」(2008)の冒頭では、「他者を理解するための言葉」の重要性を説いている。

今日の日本社会はグローバル化の中で急速にその経済・社会構造を変えつつある。この不安定化した社会状況は、新たな価値の枠組みや経済・社会システムの再構築を要求している。このような変動の時期に何よりも重要であるのは、個人の考える力とコミュニケーション能力であり、その基礎となるのは「言葉」である。しかもそれは「他者を理解するための言葉」でなければならない。「他者を理解するため」の日本語は日本社会における世代間や細分化したコミュニティー間の相互理解のためのみならず、異文化理解と国際協調に不可欠である。それがあって初めて、日本人の言語表現は、英語であれ日本語であれ本当の発信力を持つことができる。

また、人と人がよい関係を形成するためには、互いの気持ちを伝え合い、互いを理解し合うことが大切である。つまり「伝え合う力」を高めることは、よりよい人間関係を築くことにもつながる。

本学級(第2学年 男子12名 女子13名)の児童のこれまでの日常生活から見える伝え合う力を振り返ってみると、自己主張はするものの、自分の思いを言葉で分かりやすく伝えることや、互いに相手の思いを受け止めて話すというような伝え合いの力に課題が見られる。また、慣れていない友達には言葉を発せなかったり、互いにどのような関わり方をしたらよいのか分からず、戸惑ってしまったりしている様子が見受けられる。このような状況は、相手に対して自分の考えや気持ちをどのように伝えたらよいか分からないという技能や表現力に原因があると考えられる。児童の伝え合う力を高めるために、「話すこと・聞くこと」の技能を高め、児童が伝え合いを楽しみと感じ、伝え合うことへの意欲をもつことが大切である。また、それぞれの児童が、人との関わり合いを通して、「話を聞いてもらえる」という安心感をもつことも大切である。

そこで、安心して友達と話せるような人間関係の構築を図り、「話すこと・聞くこと」の領域において相手に思いや考えが伝わるというような話す技能、話し手を見てうなずきながら聞くというような聞く技能を身に付けさせることにより、児童の伝え合う力が高まるであろうと考え、本テーマを設定した。

III 研究のねらい

人との関わりを通して伝え合う楽しさや意義を感じ、自分の考えを伝え合うことができる児童を育成するために、国語科「話すこと・聞くこと」の指導において、伝え合う力を高めるための指導の工夫を探る。

IV 研究仮説

小学校低学年国語科「話すこと・聞くこと」の指導において、以下に示す工夫を行いながら段階的に指導することにより、話す技能、聞く技能が身に付くとともに、伝え合いへの自信や意欲をもつことができ、伝え合う力が高まるであろう。

1 話す技能の指導の工夫

相手をペア・小グループへと人数や場を広げていたり、話をするときのポイントや話型を示したりするなどの工夫を行う。それにより、話の順序やまとまりを考えて話す技能の向上を図る。また、相手に確かに伝わった実感をもつことができ、伝え合う意欲を高める。

2 聞く技能の指導の工夫

質問や復唱による確認、相づちなどの共感・感想の伝達などの聞き方のポイントを示したり、相手の話を聞きたいと思えるような話題の提供をしたりするなどの工夫を行う。それにより、相手の話を聞く技能の向上を図る。また、互いの意見を聞こうとする意欲を高めることができるようにする。

3 協働的な学びを促す指導の工夫

伝え合いをしている場面を相互評価させたり、伝え合いで困ったことを共有したりするようにする。それにより、人との関わり合いの中で児童が自分の課題を解決し、自分の考えや活動に自信をもてるようにする。

V 研究の実際

1 理論研究

(1) 「伝え合う力」とは

「小学校学習指導要領解説国語編」（2017）では、「伝え合う力」を次のように規定している。

人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力

また、文化審議会国語文化会国語課題小委員会（2017）によると、伝え合いを次のように述べられている。

伝え合いとは、複数の人が互いの異なりを踏まえた上で、情報や互いの考え、気持ちなどをやり取りし、理解し合い、その理解を深めることである。伝え合いは、①言葉によるもの、②言葉の周辺にあるもの（声量や声の質、話す速度など）、③いわゆる言葉以外のもの（表情、姿勢、視線など）を組み合わせで行われる。

伝え合いを具体的に「①言葉によるもの、②言葉の周辺にあるもの（声量や声の質、話す速度など）、③いわゆる言葉以外のもの（表情、姿勢、視線など）」の3つの要素からできているとされている。つまり、これらの要素に関係する児童の能力を高めることができれば、伝え合う力が向上すると捉えることができる。

伝え合う力には、音声言語能力が大きく影響することは言うまでもない。北山（2020）は以下のように指摘している。

もちろん、読み書きを通して対話的な学びは生まれるのだが、場を同じくして話したり話し合ったりすることの方が意見交換や質問を通してより有

意義な学び合いとなりやすい。そして、対話的な学びを実現するための音声言語能力そのものを学習対象とし、意図的・計画的に育成するのが「話すこと・聞くこと」の指導なのである。

この指摘のように、伝え合う力の育成と、「話すこと・聞くこと」の領域が密接な関係であると捉えると、学習指導要領における「話すこと・聞くこと」の目標に迫ることが伝え合う力の育成につながると考えられる。

(2) 「話すこと・聞くこと」の目標と技能について

「話すこと・聞くこと」が伝え合う力の育成につながると考えられる。「話すこと・聞くこと」に関係する国語科の目標を整理することにより、授業づくりの際の視点としたい。

「話すこと・聞くこと」の領域の指導事項は、「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」に分けて構成されている。

- 話題の設定、情報の収集、内容の検討
- 構成の検討、考えの形成（話すこと）
- 表現、共有（話すこと）
- 構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）
- 話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）

明確に指導事項が分類されているが、「話すこと・聞くこと」の学習は、話し手と聞き手との関わりの中で成立する学習であるため、「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」の各指導事項は相互に密接な関係がある。

指導事項の中でも、「調べる」「話す」「聞く」という個を主体とする活動を積み上げたところに「話し合う」をいう、いわば「関わり」を主体とする活動が設けられている。つまり、「伝え合い」の活動を組み立てるためには、個を主体とする活動があつてこそ充実するものであると捉えることができる。

各構成要素を参考に話すことや聞くことにおける技能や留意事項について整理し、「伝え合う力」を高める授業を進めたい。

【表1 各学年における「A話すこと・聞くこと」の指導事項と構成要素】

小学校学習指導要領解説国語編、p.30、2017

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
内容情報の収集、 話題の設定、 検討	ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。	ア 目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。	ア 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討すること。
構成の検討、 考えの形成 (話すこと)	イ 相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えること。	イ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。	イ 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見を区別するなど、話の構成を考えること。
表現、共有 (話すこと)	ウ 伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること。	ウ 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。	ウ 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。

構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）	エ 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。	エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいこと、自分の考えを捉え、自分の考えをもつこと。	エ 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。
	オ 互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。	オ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	オ 互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。
話し合いの進め方の検討、共有（話し合うこと）			

話すことに関しては、話の内容が明確になるように、構成を考えることを通して、自分の考えを形成できるようになることが求められている。さらに、他者と考えを共有することで、さらに自分の考えを深めたり広げたりすることができるようにしていくことが大切である。

聞くことに関しては、話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることとの両面を意識しながら聞いて、感想や考えを形成することができることが大切である。

話し合うことに関しては、進行を意識して話し合い、互いの意見や考えなどを関わらせながら、考えをまとめたり広げたりすることが大切である。

(3) 指導事項を踏まえた授業づくりについて

授業において、児童が豊かな伝え合いができるかどうかは、教師が意図的に行う場の設定が大きな影響を与えるといえる。滝波（2013）は、「話すこと・聞くこと」の指導について『『聞くこと』を重視した指導の在り方』『音声による教材開発』『必然性のある教材開発』『音声言語による文化財の教材化』の4点を挙げている。それを基に以下の表を作成した。

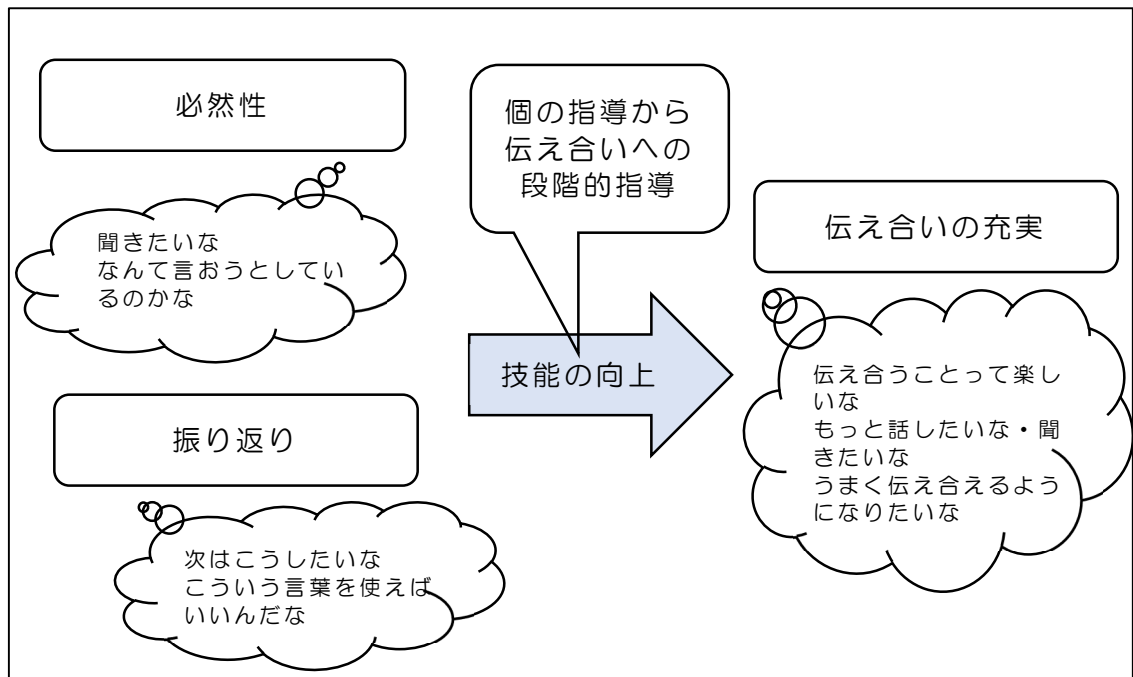
【表2 「話すこと・聞くこと」の指導の在り方】

「聞くこと」を重視した指導の在り方	「聞く」については「聴く」という能動的な姿勢と「訊く」という尋ねる積極的な関与の姿勢がある。まず「聞くこと」の価値に気付かせることが重要である。
音声による教材開発	より学習をリアルに体現するための音声による教材開発が重要である。
必然性のある教材開発	形骸化したものではなく、学習内容に必然性があるものにすることが重要である。
音声言語による文化財の教材化	日常生活の中で学習者が身近に感じるものや社会、生活の中で重要視されているものを選ぶことが重要である。

これらの4つの視点には、授業を組み立てる上でも重要であると考えられる。リアルな「音声」で児童が学ぶことは、大きな意義がある。モデルがあることで、児童は「伝え合い」というものに対する具体的なイメージができる。教師があれこれ指導を繰り返して児童のやる気を削いでしまうより、児童が自分たちの伝え合いの様子とモデルとを見比べ、「こういう言葉を使いたい」「次はこうしたい」という「振り返り」を行うことが主体的な学びになるのではないかと考える。

さらに、聞く「必然性」が大切である。児童の「伝え合いたい」という思いを引き出さなければならない。何も工夫なしに児童から伝え合いたいという思いを引き出すことは難しい。しかし、児童が話す技能、聞く技能を身に付けるためには、「やりたい」という思い、「聞かないといけない」という思いをもたせ、主体的に活動させたい。そこには、教師の意図的な指導の工夫が必要なはずである。

また、「振り返り」「必然性」を授業の中で実現するためには、「個」の指導から「伝え合い」の指導というように段階を踏んで指導する必要性が見えてくる。個のスキルを向上させることで、伝え合いが充実する。



【図1 伝え合いの充実】

2 検証授業

今回は9月と11月に2回検証授業を行った。これは個の指導を段階的に指導し、伝え合いを充実させるための手段が有効であったが検証するためである。第1回検証授業は個の指導（正しく伝えるための言葉など）を重視し、第2回検証授業は伝え合い（相手の話を受けて話を続ける）への指導を重視して行った。なお、教科書は光村図書第2学年を使用している。

(1) 第一回検証授業

- 単元名 たいわのれんしゅう ことばでみちあんない
- 単元の目標
 - ・ 相手に伝わるように、事柄の順序を考えて話すことができる。(A(1)イ)
 - ・ 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。((2)ア)
 - ・ 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞くことができる。(A(1)エ)
- 本時のねらい
 - 日常生活の場でも分かりやすく案内ができるよう、言葉や順序を考えて話すことができる。(A(1)イ)

○ 仮説

- ・ 授業づくりにおいて、道案内という場面設定で相手の話を聞く必然性をもたせ、お互いの道案内の様子を動画で撮影し、自分や友達の様子を振り返ることで、伝え合いが充実するであろう。
- ・ 道案内の場において、正しく伝えるためのポイントや道案内の時に使う言葉を活用することにより、言葉や順序を考えて相手に伝わりやりやすく話すことができるであろう。

○ 本時の展開

段階	児童の活動	指導上の留意点
導入 10分	<p>1 前時を振り返る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>正しくつたえるためのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじめに、あんないするばしよを言う。 ・通るみちのじゅんにせつめいする。 ・まがるところやほうこう、目じるしになるものを、はっきりと言う。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>みちあんないの時につかうことば</p> <p>まっすぐ・右にまがる・左にまがる・〇つ目の角を・まず・次に</p> </div> <p>2 本時のめあてを確かめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>ことばやじゅんじよを考えて、みちあんないをしよう。</p> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>○ 正しく伝えるためのポイントを思い出させる。 手立て①</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>○ 道案内の時に使うとよい言葉を思い出させ、活動で使えるようにする。 手立て②</p> </div>
展開 25分	<p>3 拡大した地図で「ただしくつたえるためのポイント」を踏まえながら全体で道案内のしかたを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>案内するのは、<u>街灯の近くのポスト</u>です。全部で<u>二回</u>曲がります。<u>まず</u>、<u>一つ目の角を右</u>に曲がります。<u>次に</u>、<u>一つ目の角を左</u>に曲がります。<u>まっすぐ</u>行くと右側にポストが見えてきます。</p> </div> <p>4 ペアで道案内をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>① ペアで抜けている施設が違う地図を見る。</p> <p>② 相手に案内する施設を一つ選び、ノートに道案内を書く。</p> <p>③ 交互に道案内をする。聞く人はワークシートの裏にメモを取る。</p> <p>④ 道案内した施設と場所があるか答え合わせをする。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>相手に分かりやすいように言葉や話す順序を考えて、道案内をしている。(観察・ノート)</p> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>○ ポストまでの道案内のしかたを全体で確認し、自分で書く際の手助けとする。</p> <p>○ 分かりやすく伝えるためにはどこが大切なポイントを押さえる。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>○ 相手と違う地図をもっていることで相手の話を聞く必然性をもたせる。 必然性</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>○ 説明が難しい児童には、目的地までの道順を指で追わせ、穴埋めのワークシートを使いながら説明できるようにさせる。</p> <p>○ メモを見ながら道順を鉛筆で追わせるようにし、相手の道案内通りに目的地までたどり着いたか確認する。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>○ お互いに動画で話している様子を撮影させ、後で振り返ることができるようにする。 振り返り</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>○ 相手の話を聞いて、相づちなどの反応を返すようにさせる。</p> </div>

段階	児童の活動	指導上の留意点
終末 10分	5 学習のまとめをする。 ・「ただしくつたえるポイント」を 考えて話す。 ・「みちあないの時につかうこと ば」を使って話す。	○ 「ただしくつたえるためのポイント」 や相手との伝え合い方でよかったと ころを称賛し、これからの伝え合い活動 の意欲を高める。

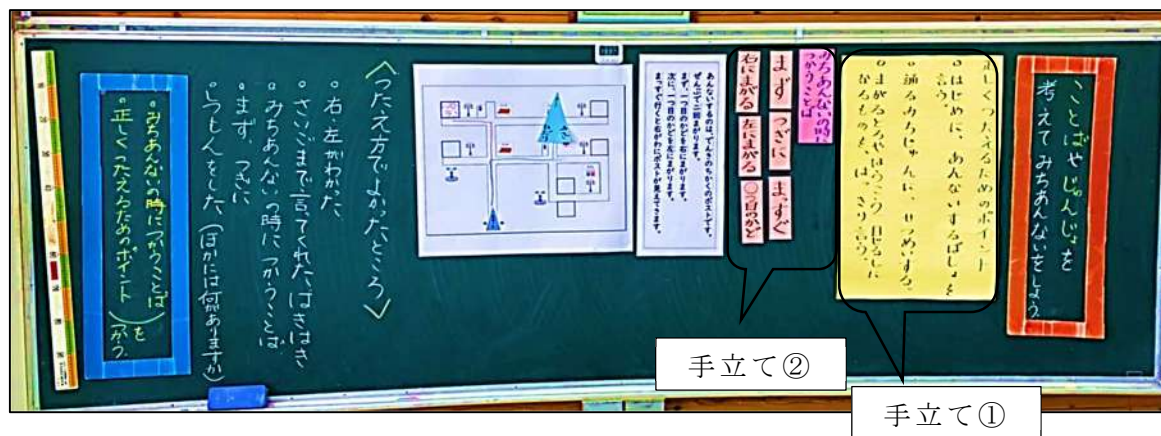
○ 学習の実際

【手立て①「正しく伝えるためのポイントを思い出させる」について】

話す技能の指導の工夫としての手立てであった。書く時の視点をはっきりさせた上で、道案内について書かせたので、児童は取り組みやすかったようである。しかし、ポイントについて言葉で理解していても、道案内のどの部分が、具体的にどのように書かれるのか理解することが難しかったようである。課題としては、道案内を言葉で書かせたことにより、お互いに話すのではなく、書いたものを「読む」活動になってしまった。「書いて話す」よりも、「即興的に話す」活動のほうがよかった。書かせたものを読むだけだったので、目を見たり、ゆっくり話したりするなど、相手を意識した話し方が不十分であった。

【手立て②「道案内の時に使うとよい言葉を思い出させ、活動で使えるようにする」について】

話す技能の指導の工夫としての手立てであった。道案内の時に使う言葉をはっきりさせたことで、児童がその言葉を使って書いたり話したりすることが十分にできた。課題としては、聞き手側の児童にも、話し手が道案内の時に使う言葉をつかえていたかどうかを評価させると、より一生懸命に聞くことができたのではないかと思われる。



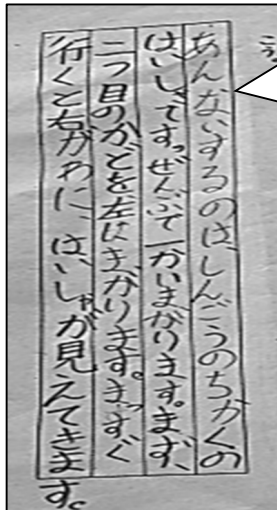
【図2 実際の板書】

【成果】

話す技能の指導の工夫を手立て①②を通して、行った。児童に「まっすぐ」「右・左にまがる」「〇つ目のかどを」「まず」「つぎに」という言葉をはっきり示したことにより、その言葉を意識して使うことができた。発表することが苦手な児童は、道案内を書いたことにより、発表しやすくなった。道案内が難しい児童には、穴埋めのワークシートを使うことで書きやすかったようである。また、メモを取る際にもワークシートを活用することができた。聞く技能の指導の工夫として、児童がお互いに違う地図を用いて活動したことにより、聞く必然性をもたせることができた。また、動画で話している様子を撮影したことにより、話している様子を自分で振り返ることができた。

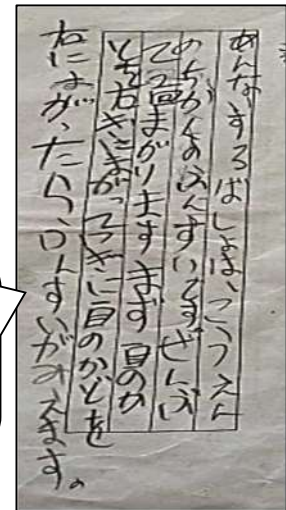
【課題】

相手の話していることをメモしながら聞くということはかなり高度であった。活動内容について見直していく必要がある。さらに、話したり聞いたりする活動に「即興性」を取り入れ、書かずに相手に自分が考えたことを伝えることができるような指導をしていく必要がある。また、全3時間という単元構成のため、児童が練習する時間があまりとれなかった。モデル文などに十分触れさせ、理解できてから行うとより効果があった。また、黒板に示したモデル文を見ながら書く児童が多かったため、ワークシートにも載せておくにより書きやすかったかもしれない。ワークシートの改善が必要である。



目印になる場所や道順を意識して書かれている。【手立て①】
「まず」「〇つ目の角を」「左に曲がると」などの言葉を用いて、相手に伝わりやすく書くことができた。【手立て②】

目印になる場所や道順を意識したり、【手立て①】「まず」「次に」「〇つ目の角を」「右に曲がると」などの言葉を用いたりして書くことができた。【手立て②】



【図3 児童のワークシート】

【図4 児童のワークシート2】

(2) 第二回検証授業

- 単元名 みんなで話をつなげよう そうだんにのってください
- 単元の目標
 - ・ 互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐことができる (A (1) オ)
 - ・ 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。((2) ア)
 - ・ 身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶことができる。(A (1) ア)
- 本時のねらい
相談に関心をもち、相手の考えを受け止め、自分の考えをはなすことで話をつなげることができる。(A (1) オ)
- 仮説
 - ・ 相手の話を聞いて自分の意見を伝え、話をつなげる場面において、聞く必然性をもたせ、自分たちの話合いの様子を動画で撮影し、自分や友達の様子を振り返ることで、伝え合いが充実するであろう。
 - ・ グループでの話合いにおいて、話合いのしかたをいつでも確認できるようにしたり、話合いで困ったことを共有したりすることにより、相手の考えを受け止め、自分の考えを話すことで話をつなげることができるであろう。

○ 本時の展開

段階	児童の活動	指導上の留意点
導入 5分	<p>1 本時のめあてを確かめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>話をつないで、考えを出し合おう。</p> </div> <p>2 今まで学習した話合いのしかたを確かめる。</p>	<p>○ これまで学習した話合いのしかた（教科書 pp. 36, 37）をいつでも確認できるようにする。 手立て①</p>
展開 30分	<p>3 話合いを行い、考えを出し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4人程度のグループで行う。 ・ 話合いを2回行う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>相手の考えを受け止め、自分の考えを話し、話をつなげることができている。（観察・発言）</p> </div>	<p>○ 話合いがよりよいものにするため、2回目の話合いの前に困ったことを全体で振り返る時間を確保する。手立て②</p> <p>○ 相手の話を基に自分の考えを言うようにさせ、相手の話を聞く必然性をもたせる。 必然性</p> <p>○ 具体的な解決方法を決めていくことで、他の場面でも生かせるようにする。</p> <p>○ 話合いの様子を動画で撮ったものを見て、自分たちの話合いでよかったところやもっとこうしたらよいところなどを振り返る。 振り返り</p> <p>○ 早く終わったグループは、グループの中でよかったと思うことを話し合うようにする。一人一人のよいところを見付けるように声をかける。</p>
終末 10分	<p>5 本時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の頑張ったことや友達のよかったことなどを振り返らせるようにさせる。 	<p>○ グループでの話合い方でよかったところを称賛し、話合いのよさが実感できるようにする。</p>

○ 学習の実際

【手立て①「これまで学習した話合いのしかたをいつでも確認できるようにする」について】

話す技能の指導の工夫及び聞く技能の指導の工夫としての手立てであった。教科書のページを使って、ポイントと具体的な例文を結び付けられるように色分けをしながら学習を進めた。そのため、始まりや終わりの言葉等、決まっている言葉は児童も積極的に使うことができた。話合いのしかたがあることによって、自分の話合いがどうであったか児童自身で振り返ることができた。また、「今ここはできていないから、次にこのポイントを頑張ろう」というような視点ができた。

しかし、教科書のページをそのまま使用したため、情報量が多く、うまく活用できない児童がいた。見やすい表に作り替えて提示したほうが効果的であったかもしれない。また、ポイントを話合いのたびにチェックできるような仕組みがあるとよかった。ポイントに沿って振り返られるようにすることで、自分の次の目



【図5 話合いのしかた】

標が明確になる。また、自分がどれだけできるようになったか分かり、次の話合いへの意欲が高まるかもしれない。

【手立て②「話し合いがよりよいものにするため、2回目の話し合いの前に困ったことを全体で振り返る時間を確保する」について】

協働的な学びを促す指導の工夫としての手立てであった。困ったことをポイントにつなげて整理することができたので、説明しやすく、児童も振り返りやすかった。困ったことを共有することで、次の話合いへの安心感につなげることができた。しかし、結局はポイントができるようになれば、困ったことは解決されるので、振り返りを充分行うことで替えることができたかもしれない。

【成果】

話合いの練習段階で、動画で話している様子を撮影したことにより、話している様子を自分で振り返ることができた。今までできていなかった「相手の意見を繰り返すこと」や「いい考えだと思ったことをみんなに伝えること」が約半数の児童ができるようになった。繰り返し指導していくことで、さらに伸びていくだろう。



【図6 実際の板書】

手立て①

【課題】

今回は動画で撮ったのが1回のみであったが、自分たちの話合いの段階を追って動画で撮影し振り返る時間を撮ったり、よい例と見比べたりする時間があるとさらに伝える力が向上したかもしれない。



【図7 友達の話し合いを動画で撮影している様子】



【図8 自分たちの話し合いを動画で振り返っている様子】

VI 研究全体を通しての成果と課題

1 研究の成果

本研究では、人との関わりを通して伝え合う楽しさや意義を感じ、自分の考えを伝え合うことができる児童を育成するために、国語「話すこと・聞くこと」の指導において、伝え合う力を高めるための指導の工夫を探るという目的で行った。小学校低学年国語「話すこと・聞くこと」の指導において、「話す技能の指導の工夫」「聞く技能の指導の工夫」「協働的な学びを促す指導の工夫」の3点を行いながら段階的に指導することにより、次の結果が得られた。

検証授業から見られる成果と、アンケートにおいて見られる成果について整理した。

(1) 検証授業から

「話す技能の指導の工夫」「聞く技能の指導の工夫」「協働的な学びを促す指導の工夫」を行った第二回検証授業について分析する。

【話し合い 1 回目】

C1：字をきれいにするにはどうすればいいですか。C2さんはどうですか。

T：いまC2さんはどうですかって聞いたんだね。

C2：名前をもっと丁寧に書いたらいいと思います。

C1：C3さんはどうですか。

C3：もっと字をゆっくり書くといいと思います。

C1：C4さんはどうですか。

C4：姿勢を正しくして書いたらいいと思います。

C1：ほかにありませんか。

…（沈黙）

C1：今日はぼくのそうだんにのってくれてありがとうございます。

学習をする前の話し合い 1 回目では、それぞれが意見を言って終わるという流れであった。これでは、相手の話を受けてつなげるということはできていない。

手立て①②から話し合いのしかたを学習したり、動画を使っての振り返りを行った後、もう一度同じメンバーで話し合いを行った。話し合い 1 回目と 2 回目は話題の提供者は異なるが、C1、C2、C3、C4の児童は共通している。

【話し合い 2 回目】

C4：今日は私の相談にのってください。絵がうまくなるにはどうすればいいですか。

C3：はい。

C4：C3さん。

C3：自由帳とかに練習をすればいいと思います。どうしてかというと、絵をいっぱい描いたら絵がうまくなりそうだからです。

C2：いいと思います。

C4：C2さん。

C2：絵を見ながら描いて、うまくなればいいと思います。なぜかというと、絵を見ながらだとじょうずになると思うからです。

C3：わたしも同じです。

C4：C1さん。

C1：自由帳を買ってもらって、いろんな絵を描いたほうがいいと思います。

C3：それはなぜですか。

C1：絵がうまくなればなと思っています。

C4：今日はわたしの相談にのってくれてありがとうございます。絵がうまくなるには、自由帳をいっぱい買ったり、絵を見て描いたりします。今日はわたしの相談にのってくれてありがとうございます。

話し合い 2 回目では、波線部の言葉をつけて話し合うことができていた。「どうしてかという（なぜかという）～からです。」（理由を付け加える言葉）や「いいと思います」（相手の意見がいいと思ったら伝える言葉）、「わたしも同じです」（自分の考えと同じことを伝える言葉）、「それはなぜですか」（質問する言葉）、まとめの言葉を使って話し合うことができた。

以下の表は、それぞれの児童について分析したものである。

【表3 話し合いについての各児童の分析】

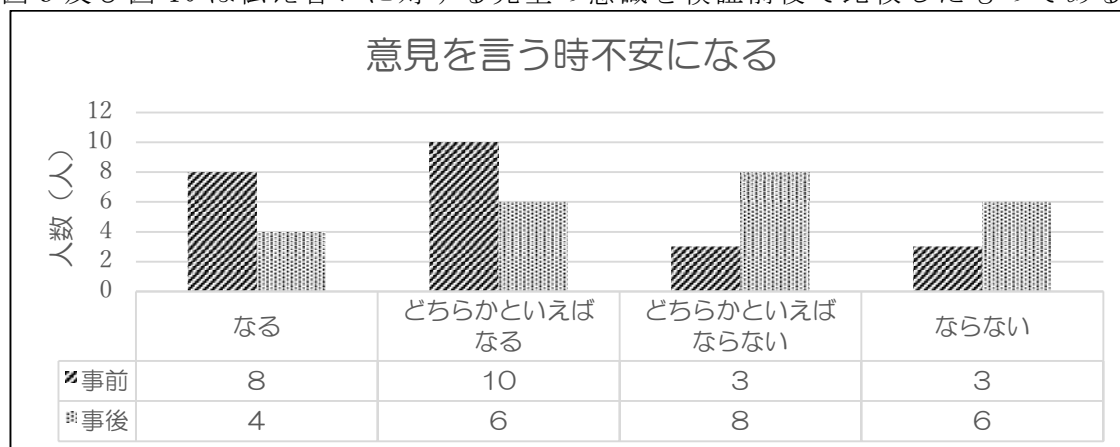
児童	話し合いについての分析
C1	自分の意見をまとめたり、相手に伝えたりすることが苦手な児童である。1回目の話し合いでは、話題の提供者であったが、友達を指名するにとどまったものだった。2回目では、自分の考えを話すことができた。友達に促されながら理由を言うことができた。話をつなぐことは、この授業だけでは十分に高まったとは言えないが、今回の手立てを繰り返し指導していくことで高まるであろう。
C2	話し合いにあまり積極的ではない児童である。1回目は自分の意見を言うことはできたが、話をつなぐことはできなかった。2回目では、相手の意見がよいと思ったら伝える言葉「いいと思います・それはいい考えですね」や理由を付け加える言葉「どうしてかという（なぜかという）～からです。」を使って話すことができた。
C3	話し合いや発表に積極的な児童である。1回目は自分の意見を言うことはできたが、話をつなぐことはできなかった。2回目では、自分の考えと同じことを伝える言葉「わたしも同じです」や理由を付け加える言葉「どうしてかという（なぜかという）～からです。」を使って話すことができた。また、質問する言葉「それはなぜですか」を使って質問することができた。
C4	話し合いや発表に積極的な児童である。1回目は自分の意見を言うことはできたが、話をつなぐことはできなかった。2回目では、話題の提供者として、最後にまとめの言葉「これから～していこうと思います」ということができた。話し合いのしかたに沿って話し合うことができた。

表3から分かるように、今回の手立ては、それぞれの児童に対して有効であったということが出来る。さらに繰り返し指導していくことで伝え合う力は高まるであろう。これは、話し合いのしかたの提示や、困ったことの共有、動画での振り返りが有効であったと思われる。特に、自分たちの話し合いと「話し合いのしかた」とを客観的に見比べながらできたことは大きかった。

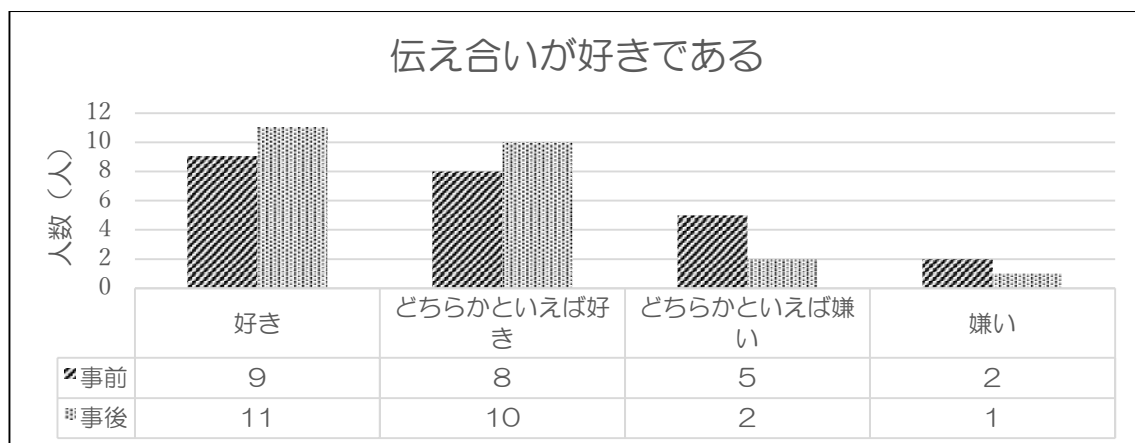
しかし、「くりかえす言葉」を使うことが最後まで難しかった。くりかえすことをほかの授業の中でも意識的に取り入れ、児童を慣れさせていくことが今後の課題である。

(2) アンケートから

図9及び図10は伝え合いに対する児童の意識を検証前後で比較したものである。



【図9 伝え合いに対する意識①】



【図 10 伝え合いに対する意識②】

図 9 及び図 10 から分かるように、「意見を言う時不安になる」と「どちらかといえば不安になる」という児童を合わせると、事前 18 人から事後 10 人に減少した。また、「伝え合いが好きである」と「どちらかといえば好きである」という児童を合わせると事前 17 人から事後 21 人に増加した。これは、今回「話す技能の指導の工夫」「聞く技能の指導の工夫」「協働的な学びを促す指導の工夫」を行ったことにより、伝え合いへの不安が少なからず取り除かれたことを示している。また、話したいという意欲の高まりも児童のコメントからも捉えられる（表 4）。

【表 4 児童のコメント】

- 発表したら楽しくなってきた。
- ちゃんと目を見て聞いてくれるからうれしい。
- 意見を言ったらはく手してくれるからうれしい。

以上のことから、児童は「話すこと・聞くこと」の技能を生かして、自分なりの考えを伝えたり学び合ったりすることにより、他者との関わり合いを通して、伝え合いへの喜びや楽しさを感じていると同時に、伝え合いへの意欲が高まっていると言える。これらの意欲を基盤として、今後児童が様々な場面において伝え合いを行うようになり、児童の伝え合う力がさらに高まることを期待したい。

2 今後の課題

人との関わりを通して伝え合う楽しさや意義を感じ、自分の考えを伝え合うことができる児童を育成するために、国語「話すこと・聞くこと」の指導において、伝え合う力を高めるための指導の工夫を探るという目的で取り組んできた。しかし、今回はあくまで国語の「話すこと・聞くこと」の単元内での検証であり、対象学年も限られていた。発達段階に応じて、伝え合うことができる児童を育成するために、場の工夫や人間関係などについても検討していく必要があるだろう。

さらに、他の授業や日常生活の様々な場面とつなげて、意識的に伝え合いについて指導していくと、さらに技能の定着が図れると考えられる。

また、授業改善として、教師が児童に身に付けさせたい伝え合う力の形成過程を想定しながらの教材分析・教材研究を行う方法を再考する必要もある。

【参考・引用文献】

- 北山雅浩、対話的な学びを育てる「話すこと・聞くこと」の指導① 複層的な指導を通して、確かな音声言語能力の育成を、日本国語教育学会、国語研究 No.557、p4、2017
- 滝浪 常雄、国語科における「話すこと・聞くこと」の指導の課題、安田女子大学紀要、41、pp.207－216、2013
- 日本学術会議、『日本語の将来に向けて－自己を発見し、他者を理解するための言葉－』、p.1、2008
- 文化審議会国語分科会国語課題小委員会、『伝え合いのための言語コミュニケーション（仮題）（審議経過の報告）』、p.3、2017